

義太夫

義太夫協会会報 第91号

平成22年7月15日

社団法人 義太夫協会発行
〒104-0045 東京都中央区築地
1-12-16 松竹会館別館3F
TEL・FAX (3541) 5471
<http://www.gidayu.or.jp>

観客について

波多一索

「いい聴き手がいい演奏家を育てる」ということがある。演劇を構成する要素は、本、舞台、役者、観客と言われるが、前の三つがみたされても、幕が上がったら観客が一人もいないとなれば、演劇としては残念ながら成り立たない。

レコード会社で新人の歌手がデビューする時など、初めてのステージでは何を歌ったのか覚えていない歌手が多い。幸いにして観客の拍手が聞こえてくるようになると、顔形まで変わってくる。

一九六〇年末ごろ、津軽三味線の名人とされた高橋竹山さんと、録音の仕事でお目にかかった。津軽民謡の大家・成田雲竹さんの伴奏者として来られた時で、目の不自由な竹山さんは、演奏の時こそ三味線を激しく奏で

ることもあったが、それ以外では師匠の雲竹さんの蔭にひっそりとつきそわれ、特に印象に残るようなことはなかった。

最初の録音の時から五年ほどして再度お会いした。以前お目にかかった時とそれほど月日もたっていないのに、余りに受ける印象が違ったのに驚いたのを、今もはっきりと記憶している。

のちに知ったのだが、十数年にわたる雲竹、竹山の名コンビは最初の録音のあと間もなく、雲竹さんの引退で突然終止符を打たれることになったからだ。降ってわいたような出来事に遭遇した竹山さんの困惑は、想像に難くない。若い頃は、門付けの苦労までして修行された竹山さんも、その頃は五十歳なかばになっていた。それまで民謡以外の、仕事をした

こともない。竹山さんの新しい仕事は会員制の音楽鑑賞会「労音」の仕事で、それまでの民謡のファン相手の仕事とは違う、津軽三味線だけのソロ・リサイタル、しかも観客は日頃は民謡を聞いたこともないクラシックやジャズのファンを相手の演奏会だった。

竹山の登場を、今か今かと息を潜めて待っている観客を前にして、竹山は足下がふるえたと後日語っている。誠に幸せだったのは、この最初の演奏会の観客が、竹山の危惧に反して、その演奏を熱烈な拍子で暖かく迎えてくれたことである。

それ以後、竹山はこの新しい観客にどんな三味線演奏をすれば喜んでもらえるか、日夜ただそれだけを考えて、それまでに聴いたこともない他国の民族音楽やポルトガルのファドなどを、必死に聴いてレパートリーを増やしていったと、竹山の晩年を知る佐藤貞樹氏は語っている。

竹山さんの転身が、民謡という垣根を越え、多くのファンの心を掴んだのは、竹山の芸が元来持っていた芸の力には相違ないが、あの時、竹山を暖かく迎えてくれた観客との巡り合わせが若しなかったらと、思い出す度に胸があつくなる思いがします。



義太夫教室OB演奏会

第六十二期卒業発表会

平成22年3月6日、新橋のスペースFS汐留に於いて催され、14名の卒業生と、12組のOBが出演いたしました。

26期生の出浦かう子さんは、教室卒業後、故竹本朝重師匠に入門されました。長きにわたり、お稽古を続けていらっしやいました。今回の舞台で区切りをつけられるとのこと、最後の舞台には、七宝の会（一門会の名前）の方々ははじめ多くの観客が詰め掛け、にぎやかで華々しいひとときとなりました。

この日、出浦さんは、朝重師匠からいただいたというお扇子をお持ちになり、肩衣は、朝重師匠の遺品で舞台上に上がられました。

14名の卒業生は、三味線4名、語り12名（うち両方2名）が一年間の成果を発表しました。感想を寄せていただきましたので、一部ご紹介いたします。



◇◇三味線◇◇

○人数が少なく、期待より不安の方が多かったのですが、先生方がとてもいいねいに教えてくださいくださったおかげで（落ちこぼれではありませんが）何とかOB会を終えることができました。不出来な点は本当に多々ありましたが、OB会に出てよかったです!!先生方、どうもありがとうございました。

(I)

○はじめのOB会。大先輩の演奏、完全に自分の語りをなさっていて心を打たれました。ありがとうございます。

(O)

○みんなとともに演じられてうれしいです。鶴澤先生と協会のみなさまに感謝いたします。

(H)

◇◇語り◇◇

○裏門も須磨浦も、初級のお稽古から続けてきたもので、OB会で語ることができて、とても感慨深いものがありました。私はおかると玉織姫だったのですが、これまであまり出したことのないような高音で、とても苦勞しました。けれどOB会は本当にワクワクして楽しい思い出になりました。指導して下さいました先生方に大感謝です。

(I)

○大変緊張しました。いつも足のしびれを感じるのですが、その暇ありませんでした。一年間の練習の成果を思うと、感慨もひとしおでした。ありがとうございました。(U)

○一谷、忠臣蔵、どちらも先生方の熱い指導の元、皆で頑張って練習したのが何よりも良い思い出です。又、いらして下さったお客様の温かい拍手が本当に嬉しく感じました。ま

だまだ、始めたばかりですが、いつもでも初心を忘れずに続けていけたらと思います。

(T)

○座る位置確認のリハーサルからものすごく緊張して声が小さくなってしまいました。いよいよ舞台に座ると心臓がドキドキ、このドキドキ感は久しぶりだ。語り同期12人がそれぞれの想いをぶつけた演奏になったと思います。土佐恵先生、越若先生、弥吉先生をはじめ、協会の先生方には本当にお世話になりました。これからも義太夫に精進したいと思えます。

(N)

○お二人の指導が各々に個性があり、とても魅力的な授業でとても良かったです。私としてはもう少し早くにその気になって練習したらよかったと思いました。とても良い楽しい勉強でした。

(H)

○思いの外、大きな会場で緊張しました。和服を着たことがなく、半襟が分からず苦勞しました。少し予備知識をいただければありが



たかったです。みなさん丁寧でありがとうございしました。(H)

○おさらいのすぐ前に練習させて頂きありがとうございました。舞台になれてもうちょっとうまく歌えるようになったと思います。着付けの手伝いもありがとうございました。自分では出来ないと思います。舞台の思い出をここに記録したいですが、その時間のことはほとんど忘れてしまいましたから、思い出がありません。(H)

○初めての肩衣姿に舞い上がり、本番はあっという間に終わってしまいました。稽古中はみんなと合わせるのがとても難しかったです。直前になって急に楽しくなりました。これで稽古が終ってしまうのがとても残念です。土佐恵先生、越若先生、弥吉先生、ご指導ありがとうございました。義太夫協会の皆様、楽しい体験を有難うございました。(W)



正会員

TPOICS

紀尾井人形浄瑠璃

去る二月二十三日、二十四日に「第三回紀尾井人形浄瑠璃く女流義太夫の新たな世界」が紀尾井小ホールにて催されました。

日経・読売新聞などにも取り上げられ、切符の売れ行きも好調で大入袋も出されました。

今回は昼・夜合わせて四演目を上演。

Aプロ「妹背山婦女庭訓」より、恋草環―竹本土佐恵・竹本土佐子・竹本越若・竹本綾一・鶴澤駒治・鶴澤駒清・鶴澤津賀花・鶴澤弥々。「壺坂観音霊驗記」沢市内より山の段―竹本駒之助・鶴澤津賀寿ほか。

Bプロ「傾城阿波鳴門」十郎兵衛住家(前)

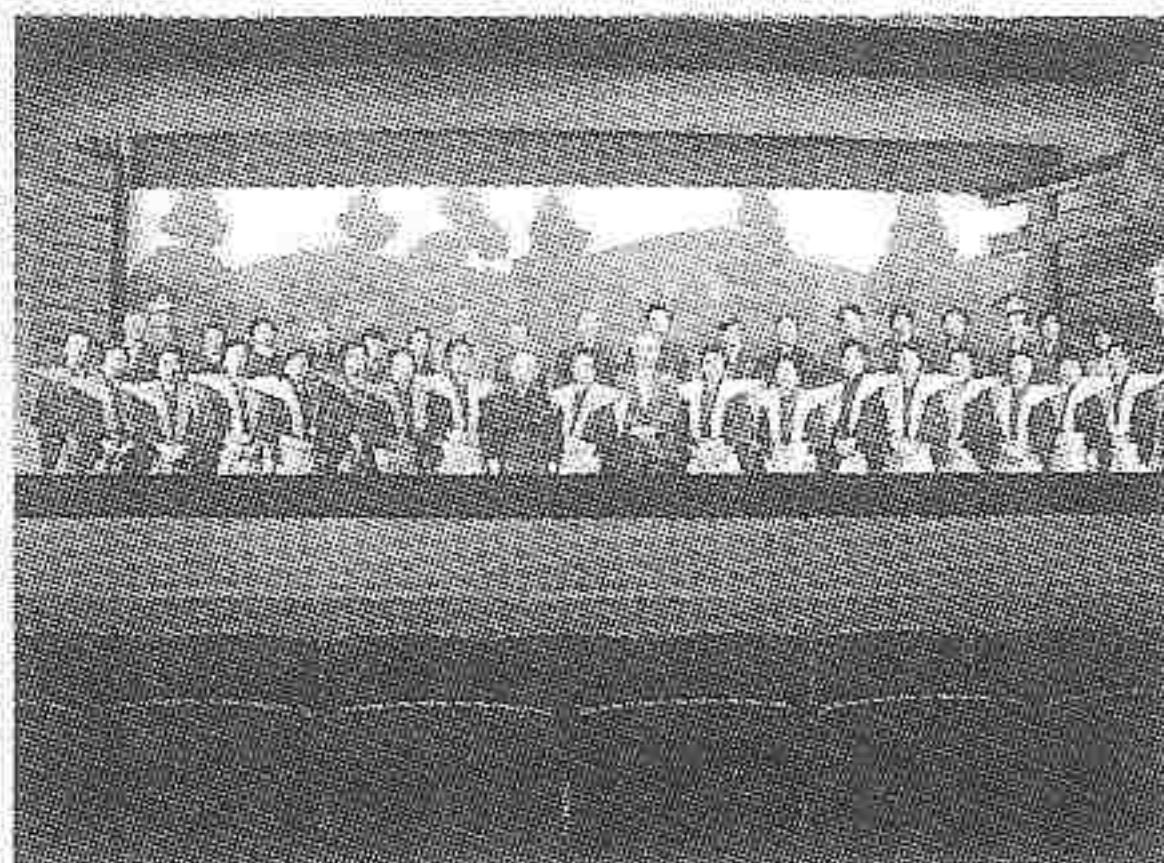
竹本綾之助・鶴澤寛也。(後)竹本越孝・鶴澤三寿々。「音牙春日月」団子売。竹本土佐子・竹本土佐恵・竹本綾一・竹本京之助・鶴澤津賀榮・鶴澤賀寿・鶴澤駒清。文楽人形特別出演は、吉田文雀師・吉田和生さん、吉田玉女さんはじめ、その他大勢の方々。

各演目ごとに、邦楽評論家(義太夫協会相談役)竹内道敬先生のお話もありました。冬季オリンピックの最中でしたがNHKニュースでも取り上げられ、お客様の暖かいご声援やご期待もうかがえ、大変嬉しく思いました。

又、この様な興業的には難しい公演を企画制作して下さった新日鐵文化財団(紀尾井ホール)のスタッフの方々、心よくご出演して



撮影：福田知弘



提供：新日鐵文化財団

下さる文楽の皆様にも感謝いたしております。多くの方々のお力添えに報いる事が出来る様に、更なる精進をと、一同心新たにいたしております。

これからよろしく、ご支援をお願い申し上げます。(竹本土佐恵)

8月演芸場公演へよみがえる娘義太夫

8月30日(月)の定例公演は、若手が日本髪を結い簪をつけ、往年の娘義太夫のいでたちで舞台を勤めさせて頂きます。近年稀な、華やかな舞台となることと存じます。

トリは国宝・竹本駒之助ほか総掛け合いで『お染久松 野崎村』をたっぷりとお聴きいただきます。

またゲストには『吉原手引草』で直木賞を受賞された、作家の松井今朝子さんをお迎えいたします。松井さんはこの7月、初代竹本綾之助の小説『星と輝き花と咲き』をお出しになります。そこで、初代綾之助・娘義太夫についてのお話をお伺いする事になりました。皆様ぜひ賑賑しいご来場をお願い致します。



松井今朝子さんのコメント

祖父と父が習っていたので義太夫は子供の頃から耳に馴染んでおり、学生時代は自身も故竹本光末師に習って、恥ずかしながら上野本牧亭に出たこともありま。そんなわけで明治の中頃に女義界のスーパーアイドルとなった初代竹本綾之助の半生を描くに当たっては、敢えて義太夫の面白さに取り憑かれた少女の視点に立ちながら物語を進めました。当時の寄席の雰囲気やなんとか臨場感あるものに仕立てたいと念じて筆を費やしています。

第四十回邦楽演奏会

——都民芸術フェスティバル——

年一回開催される、邦楽連合会主催(東京都助成)の「邦楽演奏会」も、今年で四十回目を迎え、その記念の会が去る三月二十日に国立小劇場にて、盛大に開かれました。

この会は、長唄・常盤津・清元・新内・古曲・義太夫・三曲の七団体が集まり、各々の種目を代表する名曲を演奏する会として、ファンに親しまれています。

今年はさらに、小唄・琵琶の団体も加わり、又四十回記念とあってか、開場二時間程前から劇場の前にお客様の列が出来、一部、二部共に満席となりました。

又、今回はロビーに邦楽器に直接さわる事の出来るコーナーも設置され、担当の技芸員の指導を受けながら、実際に音を出してみたり、皆様楽しまれたようです。

義太夫協会は、第一部「関取千両幟」の掛け合い、第二部は「櫓太鼓の曲弾き」を演奏しました。義太夫ファンだけでなく、いろいろな層のお客様の前での演奏は、出演者にとっても、貴重な場となっています。

来年、第四十一回目の演奏会は、三月十九日(土)と早、開催が決定しております。

ぜひ、又足をお運び下さい。

ヘシリーズ人物像

(今回から正会員への取材シリーズが始まりました。)

竹本駒之助編 第一回

出身は、兵庫県淡路島。現在は南あわじ市になっていますが、旧三原郡南淡町市福永というところでした。人形浄瑠璃発祥の地である淡路の中でも、特に人形浄瑠璃の盛んな地域で、四人姉妹の次女として生まれ育ちました。中学一年の時、当時の校長先生でいらした不動要先生が、部活動として義太夫クラブをお作りになられ、いよいよ部員募集という時に、私にお声がかかったのです。

ところが当時は、中学生では非とも義太夫クラブに参加しようという子なんていませんでしたので、誘われたままに私がクラブに行ったら、そこには生徒ではなく、校長先生をはじめとする先生方がいらっしゃる(笑)。

学校の宿直室で活版印刷の『傾城阿波の鳴門』を手渡され、そこに教えにいらしたのが、人形の座元の吉田伝次郎さんという方でした。鳴門を三味線で弾き語りで聞かせて下さいました。

帰宅して、そのことを母に話しましたところ、もし浄瑠璃を教わるのであれば、人形の方からではなく、太夫か三味線弾きに教わらないといけない。翌日からのクラブ活動は禁じられてしまいました。

もともとクラブの参加自体、自分の強い意志によるものではなかったもので、やれやれ、助かった、話はそこで終わったものと思っていました。ところが、終わるところか、それは始まりだったのです。

私の家の裏に、鶴澤友路さんが、当時は君香さんでしたが、教えにみえていて、母から今度はそこに行くようにと言われていました。ともかくにも、母は、公演があれば毎日聴きに通ってしまうほど、義太夫が大好きだったのです。母に言われるまま、放課後稽古に通いましたが、とにかく私は積極的に浄瑠璃を覚える気なんて、さらさらない。

当時、稽古用に使われていた家が、とても立派なお宅で、稽古の部屋の周囲に半間の廻り廊下があって、その外側に硝子戸がずーっと張ってありました。私がそこで稽古をしていると、近所の子たちが集まってきて、外から見えるものですから、続々と覗きにやってきました、いつの間にか顔が並んでいる。そして、「おーい、源條(駒之助の旧姓)が稽古しているぞー」って。私も、誰が覗いているのかと顔ぶればかりが気になって、稽古はまだまだそっちの気でした。

今思えば、クラブに声を掛けて頂いたことといい、浄瑠璃の稽古に集まれたことといい、声は大きく、目立つ子ではあったのだし、うね。姉は大人しい性格でしたが、私は逆だったような気がします。源條という姓も本家と私の家しかありませんから、名前も淡路で知らない人はいなかったと思います。

一ヶ月くらいたったでしようか、結局稽古に来る人が少ないということもあり、その稽古場を引きあげることとなりました。これでやれやれ本当に助かったと思いました。

ところが母に話したところ、またすぐに次の手配で(笑)。今度は四国からいらしていた、名人の島之助さんの所に稽古に行くようにと言われてまして、二駅ほど電車に乗って通いました。そこに行って初めて「今まで一ヶ月間、稽古に通っていたのなら、語ってごらんさい。」と言われてました。自分では覚える気も覚えたつもりもなかったのですが、さすがに頭には入っていたのでしよう。私の語りを聞いて、お師匠さんがびっくりされまして、「よく覚えていないじゃないの。」と。それから一年くらい定期的に通い、稽古をして頂きました。(次号へつづく)



ほんに気がメーリヤス(八杯目)

鶴澤 慎治

今回から、脱線続きだった内容を少しずつ本線に戻したいと思いますが、何をもって本線というべきなのか、既によく分からなくなっているこの連載ではありません。

「メリヤスの原拠となる曲の内、地歌に端を発するもの」に関する考察が、私のメリヤス研究(というほどのものではありませんが)のそもそものスタート地点になるわけですが、要は「流行った音楽、好きな音楽をBGMに」ということです。これは今も昔もたいして違いはありません。

我々が竹本の大先輩である故豊澤重松師も、歌謡曲をうまく取り入れて三味線の手にできないか、というようなことをおっしゃっておられました。

余談になりますが、先年、師の所蔵されていたカセットテープを整理してましたら、師が、どちらかの地芝居のために入れたと思われる、『日高川』弾き語りの録音が出て参りました。

「山伏どんの跡追うてきた女子ぢやな」と、船頭の詞までは普通に進むのですが、ここで「ア、さては今、都で流行っている、何とやらいうた唄の文句、ヨ、それぞれ」に続いて「愛しちゃったのよ、チャチャチャンチャン」と、『愛して愛して愛しちゃったのよ』(和田弘とマヒナスターズ・田代美代子)の

レコード演奏が挿入され、「愛しちゃったのよ、愛しちゃったのよ、あなただくけくを、チャチャチャン」でレコード止まり「：であらうがな。それなればな お渡さぬ、ならぬ、ならぬ」と師の弾き語り再開する：という段取りです。著作権についてうるさい昨今では考えられないようなことではあります。

まあ、これは、取り入れた、ではなく、引用・挿入になるわけで、これは本行の義太夫でも『酒屋』『壺坂』などでおなじみですね。一方、地歌を原拠とした竹本メリヤスの中でも『残月』などは、元の曲を連想するのが困難なほどに義太夫ナイズされていて、重松師も、おそらくはそうした工夫をするべきだ、とおっしゃりたかったのだらうと思います。

ですから、私も、作曲のお仕事を頂いた場合は、その時流行っている歌、好きな歌、CMのコピーに付けられた節などを取り入れるようにしています(無論、元の曲を連想するのが困難なように)。

先日『のだめカンタービレ』の映画を観てまいりましたが、劇中で演奏されるクラシックの名曲の数々はとても印象に残って、帰りにCDでも買おうかな、という気分になぜされる一方、それ以外にも、BGMやつなぎでの音楽はきつとあつたはずで、確かに耳にもしているはずなのに、全然覚えてない：いや、なかったのか？覚えてないけど、もしそれがなかったら、盛り上がりがない：竹本や、そのメリヤスも、そういうものであらう：でも、CDは売れないか：

というようなことと同時に、アニメ・漫画の表現を、実写で、生身の人間が演ずる際にどのように見せるか、ということに制作者さんの苦勞の跡が見えて、およそ三百年前の道頓堀で、大入りを続ける人形浄瑠璃を歌舞伎に取り入れた人達も、おそらくは同じような苦勞をしたんだらうなあ、などと思いながら劇場を後にしました。

さらに余談ですが、世の中何でも「何周年」とか「祝何年目」とかでイベントを仕掛けることが多いですから、我々歌舞伎竹本も、二〇一四年を歌舞伎義太夫発祥三百年(※)とでも銘打って、記念の会でもしたら面白いかな：などとも思いましたが、『のだめ』劇中の音楽について感じたことと同様の理由で、きつと商売にならないから無理だよな、と思つた次第です。(以下続く)

(※歌舞伎の役割番付に浄瑠璃演奏者の記載がある最古の記録が、正徳四(一七一四)二月、大坂荻野八重桐、嵐三右衛門座での『天神記』(近松門左衛門作)でのものであることから、義太夫による歌舞伎演出の嚆矢とされています)



協会の動き

10年1月より
10年7月まで

1月7日 義太夫教室稽古始め

於上野広小路亭

1月9日 ぎだゆう座新春公演

於お江戸両国亭

1月19日 女流義太夫演奏会

於国立演芸場

1月24日 益田糸操りワークショップ

於島根県芸術文化センター

1月25日 普及部会

於弥之音

1月27日 資料部作業日

於協会事務所

1月28日 公演部会

於協会事務所

2月1・2日 「ぎだゆう座」公演 二日間

於上野広小路亭

2月11日 益田糸操りワークショップ

於島根県芸術文化センター

2月20日 益田糸操りワークショップ

於島根県芸術文化センター

2月28日 益田糸操りワークショップ

於島根県芸術文化センター

2月25日 編集部会

於協会事務所

3月1・2日 「じょぎ」公演 二日間

於上野広小路亭

3月6日 吉村未知見習い審査

於スペースFS汐留

3月6日 義太夫教室OB会

於スペースFS汐留

3月9日 理事会

於国立演芸場楽屋

3月9日 女流義太夫演奏会

第二十九回

3月9日 伝承者研修発表会

於国立演芸場

3月19日 新公益法人制度の移行手続きに係る説明会

於都庁

3月20日 東京都邦楽演奏会

於国立小劇場

3月29日 総会

於国立演芸場楽屋

3月29日 女流義太夫演奏会

於国立演芸場

4月1日 芸団協総会

於花伝舎

4月1・2日 「ぎだゆう座」公演 二日間

於上野広小路亭

4月10日 仮名手本忠臣蔵

於上野広小路亭

4月10日 一日体験教室

於豊川稲荷文化会館

4月22日 坂本昌子正会員資格審査

於国立演芸場

4月22日 女流義太夫演奏会

於国立演芸場

5月1・2日 「じょぎ」公演 二日間

於上野広小路亭

5月12日 常務理事会

於協会事務所

5月12日 編集部会

於協会事務所

5月24日 女流義太夫演奏会

於国立演芸場

5月25日 邦楽実演家団体連絡会議総会

於花伝舎

5月26日 芸団協正会員団体事務局長会議

於東京オペラシティ

6月1・2日 「ぎだゆう座」公演 二日間

於上野広小路亭

6月19日 理事会

於豊川稲荷文化会館

6月22日 女流義太夫演奏会

於国立演芸場

6月23日 編集部会

於協会事務所

6月25日 総会

於築地社会教育会館

7月1・2日 「じょぎ」公演 二日間

於上野広小路亭

《今後の予定》

8月20日 第8回たつみ会

於上野広小路亭

8月21日 一日体験教室

於上野広小路亭

8月28日 一日体験教室

於豊川稲荷文化会館

9月10日 第3回本牧亭を聴く会

於MAKOTOシアター

9月29日 第三回竹本土佐恵の会

於深川江戸資料館小劇場

10月16日 第八回京の会

於自由学園明日館講堂

